

平成 29 年度 自己評価結果公表シート

学校法人今村学園 幼保連携型認定こども園

いまむらこどもえん

園の概要

本園は 1933 年～2014 年度まで 82 年間現在地で高槻幼稚園として、保育・教育を進めてきた。園舎全面改築を経て 2015 年 4 月より「幼保連携型認定こども園いまむらこどもえん」として再発足した。乳児は育児担当制により、保育者との愛着関係を結び子どもの毎日の生活の安定と安心をはかっている。幼児については園の理念のもと、自然に触れ様々な感覚を使って直接体験すること、感じ、表現すること、仲間と共に様々なものやことを分け合って喜ぶことを大切にしている。

本園の目指す保育・教育

- 生きること・学ぶことの根っこを育てる。
- 自然に学び、自然とともに生活を作り出す保育
- 五感を育て、ふしぎときまりに気づく保育

本年度重点的に取り組む目標・計画

- (1) 各部門とも、園の理念に沿った運営の仕方を更に研究する。
- (2) 職員間の連携と相互理解のための会議システムの構築
- (3) 職員・保育者の質の向上のため研修の充実と参加意識を高めること。
- (4) 園庭環境を具体的に变化させるためプロジェクトチームを立ち上げ計画の立案、整備の実現
- (5) 保護者対象の学習会やワークショップの実施 お祭り等への参加等を通して連携を図る

評価項目別の達成および課題状況

評価項目	達成状況及び課題
本園の理念、 保育・教育目標に沿った運営	理念、保育・教育目標についてはほぼ 100%正しく認識。自然に触れ感じることを大切に保育を進めているがまだまだ不十分ではないかと考えている。自然の中で五感を使い、いのちあるものと戯れ、群れて遊び、身体を思う存分動かす心地よさを味わいながら、色々なことを感じ取る、しなやかでたくましい心と身体を育てる、という項目は、日々の保育・教育方針の一つであるが、「五感を使い、自然の素材に触れて楽しむ機会を多く取り入れている。子どもが自然現象の不思議さに気付けるようにし、一緒に調べたり、身近な動植物の世話をする中で命の尊さに気付くようにしている」という活動の展開の仕方についてまだまだ研究が不十分なのではないかと考えている傾向が見られる。

<p>職員間の連携と相互理解のための会議システムの構築</p>	<p>年度始めにキックオフミーティングを行い、各自の個性や想いに触れながら、人間関係を深めることができた。各部門の年間の行動指針を掲示することで、各部門の理解や連携が進んだ。各部門、学年での会議は幅広く行うことが出来たが、全体での会議、学年を超えた連携を深めるための会議の機会はまだまだ不足している。「他の学年、クラスの活動にも目を向け、保育感などを保育者間で共有する」ことの大切さを感じている保育者が多く、想いを伝え、周知できていないことがないよう会議を充実させたい。</p>
<p>職員・保育者の質の向上のため研修の充実と参加意識を高めること</p>	<p>全職員の一斉研修を3回、その他、幼児・乳児・調理・保健・清掃の部門でそれぞれ専門的な研修に参加している。研修により、具体的に自己の問題点を認識し、研鑽を積み保育に生かすことができた。今年度の各自の自己評価を通して「たくさんの評価内容や項目においてかけている点や意識が足りないこと」に気付き、「知らないこと、知りたいことは積極的に情報収集する」という意欲や必要性を感じている者も多い。参加しやすい園内研修を充実させること等さらなる工夫が必要である。</p>
<p>園庭環境を具体的に変化させるためプロジェクトチームを立ち上げ計画の立案、整備の実現</p>	<p>園庭での遊びの充実のため、具体的に園庭の改造をするべく計画し、業者を選定、プランニングまでは運んだが、年度内に施工を実施することは難しかった。その中でも子どもたちは何もないところで遊びを生みだす、園庭そのものを掘る、築山を掘削するなど地面や山そのものに働きかけるダイナミックな遊びが展開されたことは大変興味深かった。次年度夏完成を目標に、園庭の改造を実施したい。</p>
<p>保護者対象の学習会やワークショップの実施 お祭り等への参加等を通して連携を図る</p>	<p>保護者との連携に関しては、機会を捉え新たな保育の取り組みや変化を細かく伝えることで理解と支援をいただいた。また、保護者アンケートを実施することにより、保護者の交流の必要性など、課題を見いだすことが出来た。月1回臨床心理士によるキンダーカウンセリングをはじめ、保育参加、保育参観、個人懇談、また、気になることがあれば、すぐに個々に個人懇談の時間を設けている。丁寧に対応することで、子どもを共に見守っていくという関係の構築に努めた。毎年恒例のひなぎく祭においてはクラスごと、また有志企画として、積極的な参加をしてくださり、有意義な機会となった。学習会は長倉洋海氏の講演会を土曜日に実施し、年長の</p>

	<p>卒園制作の日程とも重複させ、多数の保護者の方々にお聴きいただく機会とした。卒園制作として、お茶碗や箸の制作のワークショップを開催し、認定区分を超えた保護者の交流を図った。</p> <p>地域の子育て支援については、園庭開放（1、2歳児申込み制）、未就園児クラス（0・1歳児ひよこ・2歳児ぞう）、げんきっこ（月・金自由参加）、食育講座、保健講座などの機会を設けた。多数参加していただき、子育ての一助となった。講座だけではなく、その機会に、気軽に子育てについて相談していただく場ともなった。</p> <p>今後も、きめ細かく、保護者同士や職員との交流を図るべく、有意義な企画を考えていきたい。</p>
--	---

<学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果 他>

乳児クラスにおいては、チーフ会議、乳児会議、内外の研修に積極的に参加するなど研鑽に努め、子どもたちの遊びの環境について、具体的な改善を実施することができた。言葉の手渡し方、声の大きさ、言葉遣いについてを昨年度の自己評価を踏まえた今年度の課題としたが、概ね意識して子どもと接することができている。育児担当制で、子どもの安心安全をはかり、穏やかな雰囲気の中で保育を進める事については各保育者それぞれに自信を持ち、実現できていると思われる。保護者の方々からも、配慮の行き届いた保育の進め方について評価をいただいている。

幼児クラスにおいては、幼保連携型認定こども園教育保育要領の改訂も踏まえ、改めて「子どもが主体」の保育とは？と、問い直しながら、進行した一年であった。保育者2名が、大阪府私立幼稚園連盟の第27次プロジェクトチームに参加し、「プロジェクト型保育」について他園の保育者と交流を重ねながら、研究を進めていることも良い影響となり、今までの保育を、より良く変える事に躊躇することはないのだという気持ちになってゆけたのではないかと考える。特に5歳児では子どもの言葉や思い、アイデアを盛り込みながら、目の前の子どもたちにとって、「いらぬもの」また逆に「必要なもの」を感じ取りながら、子どもたちに様々なきっかけを提示し、子ども達の活動が、どのような結論に達するのか、保育者も楽しみながら見守ることができた事も多かった。

乳児幼児共に昨年度の課題を踏まえ、一步踏み出すことができた一年であった。すべて改善する事は出来なくても、研修に参加して得た情報を実際にやってみて、子ども達の様子をよく感じたり、机上で考えるよりも自分自身が様々な方々にお世話になりながら、体験してみるなど、具体的に動いた事が、新しい展開につながったのではないかと考える。この一年、教育保育要領の改訂や、職員の処遇改善の取り組みなど、国の新しい動きがあり、職員も変化についてゆきながらも、独自性を失わないよう日々の保育に努めたのではないかと考える。幼児保育では今まで以上に、子ども一人ひとりの思いや、意見に耳を傾け、一年をかけて、子どもたちとの物語を創り上げてゆくという保育が、これからは求められる。今年度、特に年長では迷いながらも、目の前の子どもたちに任せることで、子ども達の主体的な活動が生まれ、結果的に様々な心が育ち、仲間とつながる喜びを感じる事が出来たのではないかと考える。子どもや保育者の面白い気づきなど、これからの保育についての小さな芽吹きを大切にしていきたい。

2016年度と比較すると全体として、特に各自自己評価において落ち込んでいるところはなかったが、障がいのある子どもや気になる子どもについての保育の進め方について、自己評価が低く、研究、学習の必要性を感じているという傾向であった。個々の個性・特性を職員が共通理解しながら、子どもの集団の中で育ち合う関係を大切にするという視点での実践・研究の必要性を感じる。

異年齢の交流に関しては、自然に交流ができるよう、普段の生活の中でいろいろな機会を捉え、小さな単位で細かく、また密接に交わることができるように心がけたものの、クラス単位、学年単位での活動にどうしても重さが置かれ、具体的なプランの検討もないままであったので、回数も内容も十分な活動ではなかった。0歳から5歳まで、様々な年齢の子どもが常に存在する認定こども園の利点を生かした取り組みを具体化したい。

給食については、大切にしてきた食の安全、安心について、添加物・農薬・放射能などが、環境や人間にどのような影響を与えるのかさらなる研究を進める必要がある。

安全への取り組みとして、避難訓練は、回数を重ね、子ども達の中にも、「大切な自分自身を自分で守る」という意識が少しずつ芽生えてきたようである。今年度は、大阪府や高槻市より指導があり、ミサイル攻撃や、ゲリラ豪雨などによる風水害についてのマニュアルの見直しや強化を実施する必要があった。攻撃があり、飛来の可能性がある場合に、園舎内のどこに避難することが良いのかの検討をし、訓練も行った。水害のマニュアルについては現在見直しをしている。また、不審者への対応については高槻警察防犯課より職員が実地訓練を受け、「さすまた」の使い方や、防犯上留意する点についての指導を受けた。子どもたちを交えての訓練も実施し、具体策をさらに検討中である。大地震などが発生し、保護者に緊急に迎えにきていただく場合の引き渡し方など、必要な事項を検討した。子ども達を交えての訓練も2度実施し、保護者の方々には、引き渡し、及び、緊急メールの受信について訓練を実施した。反省点を踏まえ、対応を改善してゆきたい。

<今後重点的に取り組む目標・計画>

- ・各部門の連携、食育部門（安心安全な食についての研究とコストの検討）のさらなる充実
- ・職員同士の話し合いの機会を増やすこと、各自の思いを出し合える会議の方法の工夫
- ・保護者間、保護者と職員との連携強化
- ・園庭整備 子どもの園庭での遊びの充実
- ・防犯・防災対策強化、周知

<改善点および目標の達成時期と方法>

- ・職員同士の対話や交流を図るための機会や会議の方法を検討し、実施する。
- ・保育の質の向上のための研修・研究の充実（子どもの安全・子ども理解・保護者支援・食育・特別支援など）
- ・保護者の子ども理解を進め、子育ての不安を軽減するため、年に2回は子育て講座を実施し、子育ての一助としたい。
- ・幼児の保護者同士の交流を図るため、1学期のうちに交流の機会を設ける。
- ・園庭整備については、設計・見積もり等業者のプレゼンテーションが遅れており、次年度夏に

施工予定である。

- ・不審者対策、水害、ゲリラ豪雨に対する対策他、マニュアルを1学期中に改正・完成、周知する。

<施設評価委員による評価>

- ・今年度は保護者の様々な意見もアンケート等で集約し連携することが出来た。
- ・園の「生活」に対する取り組みはすでに完成されたレベルにあるため大幅な改善は見込めないだろう。むしろこれだけのサービスを維持するためには保育者の献身的な努力が必要であり裏返しとして負担も懸念される。
- ・障害のある子どもの保育について、研修を受ける時間的余裕がないためと推測するが、保育の質の向上のためにも、ケース研究など無理のない取り組みを実施し、子ども理解に繋ぐ必要がある。
- ・災害時の誘導や事故の応急処置などの安全に関することに関して、十分なマニュアルの検討と理解が必要である。
- ・仕事への姿勢や知識、能力に関して高い水準にある。
- ・コスト削減について、電力使用量の大きな削減が実現したことは、環境保全にもつながる有意義なことである。
- ・自己評価アンケートの意図もよく理解できており、職員の方々が自分を見つめる良い機会になっている。
- ・概ね積極的で仕事への意欲と向上心も強い様子がうかがえる。園の運営について勉強し、認定こども園としての課題を認識しながら更なる前進を期待する。

<財務状況>

監査法人の監査を受け妥当であると認められた。